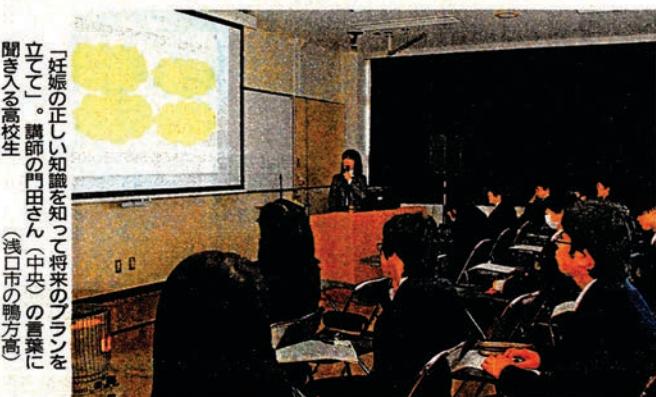
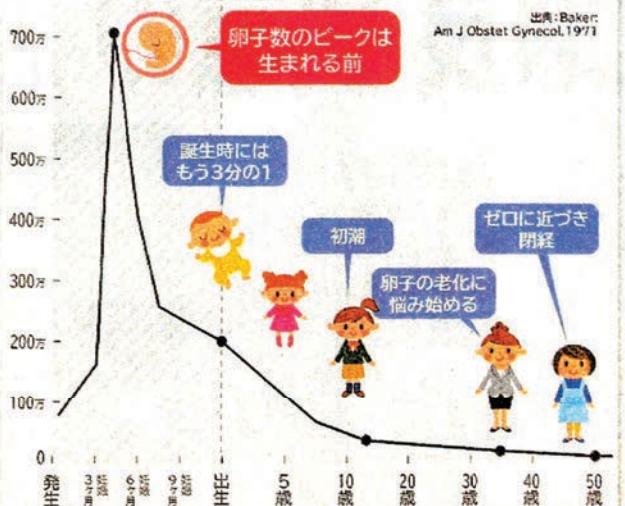


出前講座の教材



「妊娠の正しい知識を知って将来のプランを立てて」。講師の門田さん(中央)の言葉に聞き入る高校生

(浅口市の鴨方高)
授業後、桶口結衣さん(17)、「
倉敷市では「30代で妊娠しないくなるなんて」と驚きを隠さない。小野浩さん(17)も同様に「女性は50代でも妊娠できる」と思っていた」と話していた。

卵子の老化が不妊につながる女性の体のメカニズム。10代のうちから知つておいてもらいたい。将来、パパやママになるために必要な知識として、妊娠・出産の適齢期について中高生に教える特別授業に、岡山県が取り組んでいます。晚産化が進む中、不妊に悩む人の急増が背景にある。

(標準知識)

妊娠適齢期

10代で学ぶ

生殖医療 命が始まるとき

加齢で卵子減少／35歳過ぎると難しく／無理なダイエット悪影響

「納得いくライフプランを」

この日の授業は、浅口市の鴨方高であつた。2年生115人の中高生が静かに聞き入る。「誰でも妊娠できるかと言うと、そうではないかもしれません」。生徒に語り掛けたのは、不妊治療専門の人クリニック(岡山市北区)の臨床心理士・門田貴子さん(51)。門田さんはそれを分かりやすく伝え、こう結んだ。「いまの自分が大変にし、納得のいくライフプランを立てほしいんで

スクリーンに映し出したのは、卵子の数の推移を示すグラフだ。ピクトは、卵巣の時の約700万個で、加齢とともに減少していく。同時に卵子の質も低下し、35歳を過ぎると妊娠率が急速に下がってしまう。若い頃の無理なダイエットが不妊につながることもある。門田さんは、自分でも「卵子を分かりやすく伝えて、自分で判断した上で生き方を決めてほしい」。そんな願いを込め、地域の医師らと協力して始めたプロジェクトの一環だ。

こうした一貫したプログラムを監修したのは、岡山大学院保健学研究科の中塚幹也教授(54)。治療の現場で、知識不足を悔やむ不妊当事者が多く見えた。「社会に出で多忙になると前に医学的な年齢のリミットを知り、自分の思い描く人生を送つてほしい」と訴える。

若者への妊娠・出産適齢期の啓発については、中国地方の他の自治体も必要性を認識している。広島県では今春、DVD教材を制作する予定という。島根県も「ことし1月から高校生・大学生を対象に初のセミナーを開催。初回は少子化ジャーナリスト白河桃子さんが島根大の授業の一環で女性の妊娠や出産を踏まえたライフプランニングについて講義した。

岡山県健康推進課の西尾惠総括副参事は「従来の性教育は、避妊の方法や感染症予防が中心だった。型通りの学習内容では、時代の変化に対応していけない。必要な知識をいかに分かりやすく、体系的に教えていくか。医師や教育機関、自治体がさらには連携が必要がある」と話し